

kina-saffron Kote interpretation

1. 東面の説明の試み

(玄武、青竜、朱雀、白虎、黄竜に、麒麟、鳳凰)

(1) 説明の試み

(2) 東面の靈獸の配置

(3) 配置の解釈

1) 玄武

2) 青竜

3) 朱雀

4) 白虎

5) 中央に黄龍(、または麒麟)

2. 北面の説明の試み

(1) 説明の試み

(2) 十二支の元々の意味と変遷

機那サフラン酒本舗、鎧絵蔵の説明の試み(私見 春日正利 20171022)

1. 東面の説明の試み

(玄武、青竜、朱雀、白虎、黄竜に、麒麟、鳳凰)

(1) 説明の試み

北面の十二支の動植物も、商売の新築による仕切り直しとともに、家運隆盛を祈る意味が、込められていると思いますが、特に東面では、新築の事務所が火災にあわぬよう、東西南北の守護神を配置した、商売の永続的繁盛への祈りが込められているのでは、と思います。
(北面の虎に「しま模様」がないのは、白虎だからでは、と気づいたのが発端です。)
このような解釈もできます、という説明を通じて、仁太郎氏の深い教養をPRしています。

鎧絵の構想を練るにあたり、全国を旅行したそうで、魚沼の西福寺開山堂も参考にしたとされており、雲蝶作による道元の虎をも諭す感動的ストーリーが、自分の蔵にもほしいと思ったに相違ありません。そして、以下のような祈りを新築事務所の鎧絵に込めたのでは、と考え軒廻りの二頭の龍、一階、二階の窓の塗戸の靈獸を、以下のように読み解きました。
東西南北の順に、青竜、白虎、朱雀、玄武が方角の守護神とされていますが、西の守護神の白虎は、北面の鎧絵の虎になってもらうことにし、代わりに黄竜と同格の麒麟を追加します。
そして軒廻りの天空高くに龍、二階部分の空に朱雀・鳳凰、一階部分に地を駆ける麒麟と水面の玄武を考えると、東面の靈獸が龍を中心として、これしかないというような、絶妙な配置にあると思っています。

(2) 東面の靈獸の配置

東面の鎧絵の配置	土蔵東面の軒廻り、周囲の開口部のまぐさ部、塗戸に鎧絵。まぐさ部は、開口部の横材。 東面の軒廻りには、二匹の大きな龍で、一匹を青竜、もう一匹を青竜、白虎、朱雀、玄武の四靈獸を従える一番上位の黄龍と考えると、話が通る。
鳳凰(左) 正面・上 鳳凰は瑞獸（瑞兆があるときに姿を現わす靈獸） とされる	鳳凰(右) 正面・二階 鳳凰が降りるときは「聖天子の出現」を表わすとか。 ちなみに鳳凰の頸部は巳(蛇)。 鳳凰は朱雀でもある。
麒麟 正面・下 鳳凰と並び、瑞獸のひとつとされる。 黄龍と同義	玄武(亀) 正面・一階 干支の巳(蛇)は、古代中国では龍と区別されず、水神である。 麒麟が姿を現わすのは「王が仁政を施すとき」とされる。

軒廻りは、東の青龍に、四靈獸を従える黃龍。

龍神は水をつかさどり、寺院などの建造物を火災から守るものであり、縁起もいい。

二匹の龍を、阿吽の双龍とみることもできるが、ここは、青龍と黃龍と考える方が、しっくりくるように思います。

二階の塗戸部は、空を飛ぶ靈獸がふさわしい。

そこで、鳳凰をしつらえたと考えます。

一階の塗戸部は、地を這い、駆ける靈獸がふさわしい。

そこで、ひとつに北の玄武、もうひとつに黃龍と同義の麒麟をしつらえたと考えます。

(3) 配置の解釈

1) 玄武(げんぶ、拼音: xuánwǔ ショワンウー)中国の神、四象の「太陰(老陰)」、四神の一つ、靈獸。北の星宿の神格化。玄天上帝ともいう。

古代中国では龍と蛇に区別はなく蛇を小龍と呼び、従って蛇もまた水神だった。

一方、陰陽五行(木火土金水)では、玄武は水の精だとされており、水神である亀と蛇が合体した玄武(亀蛇)は、とても強力な水神ということになりそう。

玄武は北方を守護する水神。「玄」は「黒」、黒は五行説で「北方」の色とされ、「水」を表す。脚の長い亀に蛇が巻き付いた形で描かれることが多い(尾が蛇となっている場合もある)。ただし玄天上帝としては黒服の男性に描かれる。

古代中国において、亀は「長寿と不死」の象徴、蛇は「生殖と繁殖」の象徴で、後漢末の魏伯陽は「周易參同契」で、玄武の亀と蛇の合わさった姿を、「玄武は亀蛇、共に寄り添い、もって牡牝となし、後につがいとなる」と、陰陽が合わさる様子に例えている。

2) 青竜(せいりゅう、せいりょう、拼音: qīnglóng チンロン)

中国の伝説上の神獸、四神(四象)の1つ。東方青竜。蒼竜(そうりゅう)ともいう。

福建省では青虎(せいこ)に置き換わっている。日本語では青は英語で言うブルーを意味することが多いが、「青」の原義は青山(せいざん)・青林(せいりん)のように緑色植物の色であり、本来は緑色をしているとされる。東方を守護する、長い舌を出した竜の形とされる。青は五行説では東方の色とされ、また、青竜の季節は春とされている。天文学上は、二十八宿の東方七宿に対応する。東方七宿をつなげて竜の姿に見立てたことに由来する。

3) 朱雀(すざく、すじやく、しゅじやく、拼音: zhūquè チューチュエ)

中国の伝説上の神獸(神鳥)で、四神(四獸・四象)・五獸の一つ。

朱雀は南方を守護する神獸とされる。翼を広げた鳳凰様の鳥形で表される。

朱は赤であり、五行説では南方の色とされる。鳳凰、不死鳥、フェニックス、インド神話に登場するガルーダ等と同一起源とする説や同一視されることもある。

4) 白虎(びやっこ、拼音: báihǔ パイフー)

中国の伝説上の神獣である四神の1つで、西方を守護する。西方白虎。

細長い体をした白い虎の形をしている。白は、五行説では西方の色。

中国天文学では、周天を天の赤道帯に沿って四割したひとつで、二十八宿のうち西方七宿の総称。西方七宿(奎・婁・胃・昴・畢・觜・參)の形をつなげて虎の姿にかたどったことに由来する。

5) 中央に黄龍(、または麒麟)

東の青龍・南の朱雀・西の白虎・北の玄武。五行説に照らし合わせて中央に黄龍。

(書籍によっては麒麟を据える場合もある)。

また、瑞獸の四靈(応龍・麒麟・靈龜・鳳凰)を四神と呼ぶこともある。

黄龍(こうりゆう、おうりゆう、繁体字: 黃龍; 簡体字: 黄龙; ピン音: huánglóng

中国の伝承や五行思想に現れる黄色の竜。黄金に輝く竜であると言う異説もある。

四神の中心的存在、または、四神の長とも呼ばれている。四神が東西南北の

守護獣なのに対し、中央を守るとされる。五行説で黄は土行であり、土行に

割り当てられた方角は中央である。黄龍は皇帝の権威を象徴する竜とされたが、

後に麒麟と置き換えられたり、同一視されるようになった。

2. 北面の説明の試み

(1) 説明の試み

十二支は、元来、穀物の一年、十二カ月であり、全てあるはず。

一部は、四瑞獸と兼ねているようです。

ただひとつ、申が何処か、が問題ですが、私は、当主の頓智ではないかと思っています。

申は、ちゃんといいます。

(2) 十二支の元々の意味と変遷

十二支

陽 子 寅 辰 午 申 戌

陰 丑 卯 巳 未 酉 亥

『漢書』律曆志によると「子」は「孳」(し:「ふえる」の意味)で、新しい生命が種子の中に萌(きざ)し始める状態を表しているとされる。

『漢書』律曆志によると「丑」は「紐」(ちゅう:「ひも」「からむ」の意味)で、芽が種子の中に生じてまだ伸びることができない状態を表しているとされる。また、指をかぎ型に曲げて糸を撚ったり編んだりする象形ともされる。

後に、覚え易くするために動物の牛が割り当てられた。

「寅」は「蟄」(いん:「動く」の意味)で、春が来て草木が生ずる状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の虎が割り当てられた。

Original character means to move and expresses the state that spring comes and the trees and plants sprout.

Later, kanji "tiger" was allocated in order to memorise more easily.

「卯」は『史記』律書によると「茂」(ぼう:しげるの意味)または『漢書』律曆志によると「冒」(ぼう:おおうの意味)で、草木が地面を蔽うようになった状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の兎が割り当てられた。

なお、フランス、中国の一部、チベット、タイ、ベトナム、ベラルーシでは兎ではなく猫が割り当てられる。

「辰」は『漢書』律曆志によると「振」(しん:「ふるう」「ととのう」の意味)で、草木の形が整った状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために神話上の動物である龍が割り当てられた。

「巳」は『漢書』律曆志によると「巳」(い:「止む」の意味)で、草木の成長が極限に達した状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の蛇が割り当てられた。

「午」は「忤」(ご:「つきあたる」「さからう」の意味)で、草木の成長が極限を過ぎ、衰えの兆しを見せ始めた状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の馬が割り当てられた。

「未」は『漢書』律曆志によると「昧」(まい:「暗い」の意)で、植物が鬱蒼と茂って暗く覆うこととされ、『説文解字』によると「昧」(み:「あじ」の意味)で、果実が熟して滋味が生じた状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の羊が割り当てられた。

「申」は「呻」(しん:「うめく」の意味)で、果実が成熟して固まって行く状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の猿が割り当てられた。

「酉」は「繙({糸曾})」(しゅう:「ぢぢむ」の意味)で、果実が成熟の極限に達した状態を表しているとされる。

後に、覚え易くするために動物の鶏が割り当てられた。